

自由に生きよと風来神は言うけれど

酢豆腐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴブリンスレイヤーの世界にオリ冒険者を何人か放り込む試み。

ニンジャも綺麗なお姉さん500歳も出る。

目次

プロローグ

秩序と宿命の神々と混沌と偶然の神々が相対する遊戯盤たる四方世界。

その地下には広大な空間、地下世界（アンダーダーク）が存在し、地上同様に人々の営みがある。・・・但し地上と異なる点として混沌に与する勢力と異様な魔力に満ちているという点が挙げられるが。

この地下世界に強大な勢力を誇る一つの種族がいる。彼等はドワーフ古語でドウエルガルと呼ばれる。灰色の皮膚と髭、乏しい体毛、強靱で毒の効きにくい身体に暗視能力。

はるか遠き上古の時代にはその欲深さから大工房都市を拡張しすぎてしまい悪しきものを目覚めさせた。彼等はデーモンたちに隷属させられ、長い苦難の時代が鋼の神への信仰を失わせた。結果として彼等はデーモンのくびきから逃れるために、絶え間ない労苦を強いる斧と征服の女神の力を借り、彼女を信仰するようになった。

その為に彼等は常に骨の折れる仕事をし、悲観的で利己主義で愚痴ばかりこぼしている。そして外敵に対しては団結するものの都市内部では常に氏族同士が足を引っ張りあい、勢力拡大の野心を抱えて永い永い時を過ごしてきた。

こうして我々は正しく神代のドワーフの血を受け継ぎながらも混沌のものとなったのだ。

そんな氏族社会で腐れボンズに権威があり、恣意的な判断だの調停の名を借りた弱いものいじめがまかり通るところに、他の神から託宣を受け、この工房都市から出て自由に生きるなどと言い出す奴がいたらどうなると思う？

答えはリンチ（神前裁判）され牢獄に放り込まれる、だ。ひそかに出奔するための準備を整えていたつもりが、何時のまにやら監視されていたらしく、突然完全武装の男衆に囲まれ棒で叩かれた。

幼いころからディープウオーデンの見習いとして他の氏族の子供たちと集団生活を送っていたがために氏族内に味方が少ないのも響

いたらしい。デイープウオーデン、トンネルの守護者、生身の警報装置。我々は地上でいうところの街道警備隊のようなものだ。鉄と血で結合した非ドウエルガルの集団にしてドウエルガルらしからぬ誠実な戦士たちの殿堂である。そこでは役に立つのならどのような神から奇跡を賜っていようが問題にはされなかった。

「おどりゃこんクソ外道！氏族裏切って一人地上で気楽にすごそういう腹かい！」

「ほうじゃほうじゃ！」

勤めを終えて戻ってきたところにこの罵声である。

「おう。若い男衆が完全武装で雁首そろえてからにどしたんなら」

「とぼけるのもええ加減にせえよ！デイープウオーデンちゅうのは芸が細いのう！」

「これ見てもまだとぼけられるんかのう！」

固い地面に投げ出されたのは保存食や革の水袋、真新しいランタン、光沢を出すためのやすりがけ中だった風来神の聖印である。どうやら自室を相当に家捜しされたらしい。

「ほーん。これがどしたんなら。ワシがどんな神さん信じようがこんなには関係の無い話じゃないの。のう！」

殺気だつて私を囲む連中は本来灰色の顔を赤黒く染めて罵声を浴びせてくる。私がこの先の見えない生活から足抜けし、冒険者にでもなつて好きに暮らそうという考えなのが気に入らないらしい。もともと寄宿舎時代から風来神の声が聞こえていた私に、自己犠牲やら斧と征服の女神への信仰なんかは存在しない。この騒ぎも大方長老連中が若い衆を焚き付けているのだらう。うちの気の弱い親父が青い顔で見物人に混じっているのが見えた。

「こんなはワシを裏切者呼ばわりするがよ、ワシら皆よ灰色鋤人（ドウエルガル）だろうが闇人（ダークエルフ）だろうがよ、旨いもの食つてマブいスケ抱くために生まれてきたんじゃないの！」

「それだつてよ、銭がなけりや出来はせんので。自分で楽しく銭稼いで自分のために自由に使おう自由に生きようってことに身体張るの何が悪いの！のう！」

「このボンクラあ！」

そこからは戦槌構えて突っ込んでくる若い衆を盾でいなし、斧剣で突き刺し、ひっかけ、頭をかち割り10人から先は数えていないが、ある程度片付けた時点で多勢に無勢で強かに殴られ取り押さえられ、集会所の女神像の前に引き出され、群衆のリンチに遭った。

とつさに《幸運》の奇跡、ヤバそうな相手には《不運》の奇跡を使用限度の3回まで使いきって凌いだので見た目ほどに傷は深くない。

そしてスケイルメールやらガントレットやらも外されずに首枷、手鎖その他で拘束されて牢獄に放り込まれているというわけだ。武器はともかく大振りの円盾、デーブウオーデンの鉄靴と斧の紋章が描かれた盾を奪われたのは大変な屈辱であった。そして恐らくこのままでは近いうちに私は処刑されるだろう。

「ぶち殺しちやる・・・ぶち殺しちやるど・・・ぶち殺しちやる・・・！」

さしたる考えが有るわけでもないが、殺意が言葉として溢れ出る。腫れた顔に、痛む頭、へこんだり鉄片の欠けたりした鎧は私を非常に惨めつたらしい気分にした。風来神の教えの一つに《力無き者に自由を語る資格なし》というものがあるが正にその通りだ。私にあの場の全員を相手取って勝てる力があればこのような事にはなっていない。

その時だ。中性的な声が私に囁きかけたのだ。風来神からの託宣である。

《君のもとにこれから君の先達がやってくる。君は彼女に着いていてもいいし、いかなくても良い》

風来神の良いところは私のような男に奇跡を授けてくれること、教義が分かりやすいこと、託宣でもって回った言い回しをしないところである。

ちなみに私が授かっている奇跡は《小癒》《幸運》《不運》だ。冒険者になったら私はクレリックなり戦司祭として扱われるのだろうか。致命的な傷を負わずに済み、未だに命脈を保っていることを風来神に感謝し、祈る。

祈りを終えて身体をほぐしていると牢獄の前に誰かが音もなく現れた。

「その姿から察するに君が世にも珍しい灰色鉾人の風来神信徒か」

その女閨人は完全に影と同化しているかのようだった。外套のフードを下ろすといっそ冒流的とさえいえる美貌が顕になった。

「実際のところ君の同僚が手引きしてくれたお陰でこの要塞めいた大工房都市への侵入は容易だったのさ」

あの最も非ドゥエルガルの集団の誰かが手助けしてくれたらしい。10年の歳月を厳しい訓練・集団生活とトンネルに捧げたのも無駄ではなかったらしい。得難い戦友に感謝する。

「さあ、立ちたまえ。信徒の先輩にして託宣を受けたるこのボク、閨人の忍馳が囚われの君を自由にして差し上げよう」

私を戒めから解放すると、芝居がかった仕草で一礼して彼女はそう言った。

「す、すみません世話になります」

私は可能な限り恭しくオジギした。

「ふーん。君はあんまりボクの知ってる灰色鉾人らしくないね」

それはそうだ。一部を除いてドゥエルガルという種族は恩知らずの外道ばかりだ。

話ながらも忍馳は魔法のかかっているとおぼしき肩掛け袋から私の斧剣と大振りの円盾を取り出す。

「それに君は鉾人の系譜にしちゃ随分と”のっぽ”なんだねえ」

他のドゥエルガルに比べると私はおよそ頭二個半は背が高い方だろう。悪目立ちしてしかたなかったが。

「上背が有るぶん力は有りますけえゴブリンでも追剥ぎでも叩っ殺しちゃりますけえのう！使ってやって下さいやー！」

「あははーじゃあしばらくは一緒に行こうか。風の向くまま気の向くまま、ってね」

そうして私達は大工房都市から脱出し、旅の連れ合いとなったのだった。